

「留学」という自己挑戦の喜びを

知的世界を広げるために大学の外国語・教養教育の強化を図れ

内向き志向を強める日本にあっても世界に通用する人材を輩出し続け、「本物の教養教育」を掲げる国際教養大学（秋田市）の中嶋嶺雄学長に、若者育成論と大学教育のこれからを聞いた。

国際教養大学学長
中嶋 嶺雄

■平等に与えられた人生の時間の中で

——留学する若者が減っています。
中嶋 人間は誰もが平等に時間を与えられていますが、時間には限りがあります。限られた時間の中で、人が得るべき最も重要な人生の喜びとは何か。それは、知的世界を広げることでしょう。海外に挑戦することで知的世界は、さらに大きくなります。世界に出て知的経験を積むことが一番大事だと悟れば、多くの若者が今よりさらに

海外へ挑戦していくでしょう。そうした経験の重要性を伝えるのが本来、教育の役目ですが、日本の教育は旧態依然とした部分が多く、若者の意識を大きく海外へ向けさせるまでには至っていません。

私はこの春以来、英国、米国、ロシア、中国へ大学間協定を結ぶために赴きましたが、いずれの国でも日本の存在感が非常に薄くなっていると感じました。一方で、海外の学生は世界にしようとする学生が非常に多いのです。

能しておらず、教養や外国語の教育がほとんど削られています。こんなことでは、これからの日本は世界と伍していくことはできません。大学が、学生をもっとエンカレッジ（励ます）して、学生の知的世界を一つでも二つでも広げる教育をしていく必要があります。知的世界を広げるための一つの根本は外国語の習得です。今や英語力は

も黙っています。こうした状況を変えするために、大学の外国語・教養教育の強化が重要です。

国際会議に出席しても、日本人はいつ

国際教養大学の場合、すべての学生に対して1年間の海外留学を義務付けています。留学には、TOEFL iBT[®] of English as a Foreign Language 英語を母国語としない人々の英語コミュニケーション能力を測る試験）で、留学に最低必要としている点数の550点（PBT）を越えなければいけません。こうして留学できたとしても、今度は留学先での授業が待っています。大学

なかじま・みねお

1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了（社会学博士）。東京外国語大学学長、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、中央教育審議会委員（外国語部会主査、大学院部会長）、内閣教育再生会議有識者委員など歴任。その間、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院などで教鞭を執る。04年国際教養大学開学に伴い理事長・学長に就任。03年度「正論大賞」受賞。著書に「全球（グローバル）教育論」「国際関係論」「北京列烈（上・下）（サントリー学芸賞受賞）」など多数。



の卒業には124単位が必要なので、留学中に1年分の単位（30単位程度）を取得する必要があります。世界のトップクラスの提携校での外国語による単位取得ですから、これも非常に大変なことです。しかし、本学の学生はみなきちんと取ってきます。さらに、帰国後は留学で得た知識や経験を専門教養教育課程の単位と互換しないといけません。海外留学を国が後押しする際にはこうした支援システムの整備だけでなく、「若者の人生そのものを豊にするために」という視点こそが必要なのです。

■企業に評価される学生の実力

——留学で学生は変わりますか。
中嶋 留学から帰ってきた学生たちは、みな一回りも二回りも大きくなっているんですよ。

本学は、就職率の高さでも注目されています。企業の採用担当者に言わせ

ると、口先だけの英語ができる人は大勢いると言います。ですが、採用担当者が秋田にまでたくさん来るのは、本学の学生が海外留学など豊かな教育環境に育まれて、たくましさ、情報発信力、それに個性を身につけているからだといえます。企業が大学に来て学生と面談する機会も多いのですが、その場で内定を決める会社もあります。こうした学生を育てるためにも、教養科目を学部段階でしっかりと修得させる必要があるのです。ところが日本では大学院の重点化に重きが置かれている。

こうした動きは日本だけであり、これが学部の空洞化を招いている面があります。学部段階で一番必要なのは、本学の教養と外国語の運用能力を身に付けることです。この二つを学部段階でしっかりとやっているのが国際教養大学です。驚かれるかもしれませんが、本学の卒業率は50%です。低いように思われるかもしれませんが、これがアメ

リカの有数の大学などでは普通のグローバル・スタンダードなのです。大学は学生をきちんとした人材に仕上げ世に送り出す責任があるのです。

■英語に加えて、もう一言語を

—今の時代に求められる教養・英語教育とは何でしょうか。

中嶋 教養教育を意味する「リベラル・アーツ(Liberal Arts)」は、Arts and Sciences(芸術と科学)ともいいます。Artsには人文科学・社会科学をはじめ芸術も入ります。

本学では、カリキュラムの中に「芸術・芸術論(音楽と演奏)」という授業があります。ここで世界的ヴァイオリンニストの渡辺玲子さんに特任教授として授業をしてもらっています。少人数の授業で、一流の先生が実際のヴァイオリン演奏を聴かせながら学生に音楽そのものを体感させるのです。例えば、ヴィヴァルディの有名な協奏曲

「四季」の中に「春」という曲がありますが、その中で「春雷」を表現している箇所があります。ヴィヴァルディは楽譜で「春雷」をどう表現したのか、なぜそうした箇所を入れたのかを先生の演奏により体感させるのです。

Arts and Sciencesというように教養教育には理科系の教養も必須ですね。本学では生物、科学、物理を実験を含めて学べますし、数学や統計学もやっています。

本学では新入生に授業が始まる前にTOEFLを受験させます。その成績に応じてクラスをレベル分けし、学生の力にあつた学習をすることで効率よく力を伸ばせます。日本の教育の悪いところは、すべてが平等主義な点です。それでは本学の能力は身につけません。しかし、レベル分けすることで、上級のクラスでは3カ月もすれば英語で国際問題が議論できるようになります。若者はすごい力を持っている

と実感します。

私は母語である日本語、国際的なコミュニケーションツールとしての英語に加えて、もう一言語を勉強するよう学生に勧めています。これを「複言語主義」と言っています。「日本語と一緒に英語を勉強すると日本語ができなくなる」といった通俗的な論議がありますが、これは間違っていると思います。英語ができれば国語もできます。そうした勉強をすることで言語空間が刺激され、母語の能力が磨かれるだけでなく、母語の良さも再評価できます。そうした点を考えても、できるだけ早い段階から耳から聞いて外国語を勉強することは大事です。来年度から小学校での英語教育が始まりますが、そうした点をきちんと考えていくべきです。英語を学ぶとは異文化を学ぶことでもあり、それは自分の世界を広げる重要ですね。いまは受験科日本位で音

楽や美術といった情操教育を本格的に学ぶことはありません。これは教育の根本を間違えていると思います。

—学長は中国政治の専門家でもあります。中国と日本の若者を比べた場合にどういった違いを感じますか。

中嶋 今の段階で比べると、日本の若者の方が退屈的ですね。中国の若者は進取の意欲、探求心に満ちています。しかし、経済的には中国の一人当りGDP(国内総生産)は今でも日本の10分の1以下なのです。逆に考えると、日本の若者がなぜこれほどまでに覇気が無くなったのかということ。それは日本の教育制度が、若者を元気づけるようになっていないからです。

米国の大学院では学生の個性を非常に重んじて、個性を伸ばすことを奨励します。日本は逆に個性を潰そうとさえします。教育は中国の「孟子」が語源で、「教えてこれを育てる」という意味です。教えることだけをたくさんし

て、育てることを忘れてしまっています。いかに育てるが大事なのです。

■世界基準のエリート育成を

—政治を担う存在としての日本の若者をどう育てるべきでしょうか。

中嶋 その点でいうと、日本はこれまである種のエリート教育はやってきたといえます。しかし、大学教育を中心としたエリート教育がシステムとしてグローバル化していないのです。例えば昔は、東京大学の法学部を中退して外交官になることは非常に名譽なことでされました。しかし、外交の世界でも今や外交官が博士号や修士号を持っているのが普通です。日本は明治維新以来のエリート教育で成功してきましたが、今やそれでは世界について行けなくなってしまいました。

国際政治のプレイヤーとしての日本人を育てるためには、国を担う人材が見識・良識を深めることができる知的

基盤社会を整える必要があります。そうした人材を育てるためにも、学部のカリキュラムに基礎を置く高等教育の再編が重要なことです。日本の社会は、4年間で大学を卒業するとすぐに就職するという枠ができ上がってしまっている。これも問題であり、そうした時代ではもうありません。国際政治のプレイヤーを担おうとする志ある若者は、良質な高等教育を体験する時間を十分に取って欲しいですね。

グローバル化時代にどういう人材を育てるべきか、これからの教育をどうすべきかといった重要な問題が政治の世界ではほとんど争点になっていません。しかし、人材育成は政治にとって一番大事な課題です。どういう人材に国を担わせるのかという問題ですから、その点では政治家も真剣に考え直さなければならぬと思います。多くのマスコミは政治の世界を面白おかしく報道したり、批判したりしています

が、政治の本質とは何かということをおぼろげに報道している気がします。

人材教育をきちんとしていかなければ、国は滅びてしまうと思います。シンガポールで、ある国際会議に出席しましたが、私が英語で基調報告をした後、当然質疑応答があるわけですが、日本人はやはりだれも発言しない。その間に韓国や台湾や中国、マレーシアなどの代表がほとんど手を挙げて発言しますが、その英語は正直上手とはいえません。しかし、みな恥ずかしがることなく発言します。それが大事な姿勢なのです。日本人は文法がどうかとか、スペルがどうかとか細かい部分のみ執着してしまふ。それではとても対応できません。日本が世界に向けていかに情報発信するかを国として考えないと、世界政治における日本の存在はますます低下するでしょう。

■靴にいつも辞書を入れて

アメリカの国際政治学の権威に言われたことよ(笑)。十分に会話もできなかつた英語ができるようになってきた。それも苦勞のおかげです。決してうまくはないですが、コミュニケーションは十分できる。それでいいんじゃないかと思うんです。私は英語をしゃべる点において、大事なのは「ボキャブラリー(語彙力)と勇氣」だと思えます。おどおどしないで、いざとなれば「では、あなたが日本語でしゃべってごらん」と思えばいいわけです。そうすれば自然と口から英語が出てくる。そういうことができる若者がもっと出てくると、日本は国際的に通用する国になると思います。

ある国際会議に行くと、「中嶋さんの英語はtoが多すぎる」と言われたこともありますね。「would like to」の後にもう一度to…を使ったのでそのように指摘され、英語をその場で直されたこともありますよ。40歳を過ぎたから「君の英語はかなり良くなったよ」と若い頃から私を知っているア

——学長が初めて海外に行かれた際に経験したことを教えてください。

中嶋 そのインパクトは大きかったです。私が初めて海外に行ったのは1966年の11月です。中国へ行きまして。その時の中国は文化大革命の渦中でした。初めて国際的な舞台で発言したのは、それから4年後の1970年でした。当時は30代でしたね。モスクワ大学で第14回国際歴史学会に出席しました。日本からは名だたる学者が大勢出席していました。ところがその会議では誰も発言しなかつた。そこで私が学問と政治のあり方について思い切った発言したところ、その発言に賛同してくれる旧ソ連の学者が非常に多かつたのです。それがきっかけとなり、旧ソ連の研究者とコネクションをつくることができました。あの時に発言していなかつたら、今の私はなかつたかもしれません。

私自身の言語体験を話すと、実は英

からすれば反発したくなる個所もありますが、反発は決して悪いわけではない。そうしたことも含めて、時代の風潮に流されないで、より独自でクリエイティブな思考ができることが若者教育には必要です。

——学生に対して厳しい指導をすることもあると伺いましたが。

中嶋 今は人数が少ないですから、直接指導することもあります。学生とのアポイントメントは最優先しています。人生は悩みが多いものですから、その時に相談に乗る相手が必要だと思います。時には学生に厳しい話をすることがあります。針路や人生に対して真剣なアドバイスを必要とするときには、自分の経験をかかり話してあげます。若者は創造力をもっています。そうした良いところを伸ばすことが重要です。しかし、単に巻めるだけでなく、タイミングが大事です。お世辞では逆効果です。